

大石静と阿川佐和子の対談。あとがきに、「一番面白いところは生涯活字に出来ないようなことも多く」と書いてあるように、本音で「喉が嘎れるくらいおしゃべりした」結果をまとめたもの。2人とも、小さいときから「生きることは辛い」ということを体験してきているので、ある意味根性が据わっている。

大石 旦那様がお母様とふたりでご飯を食べてくれたりなんて、なかなかできることじゃないわよ。

阿川 「あなた何年生まれ?」「昭和23年です」「お若いのねえ」「うーん、そうでもないかな」なんていう母とオジサンのやりとりを聞いていると、ありがたいなと思います。もの忘れが進んだ母は何度も同じ会話を繰り返すんだけど、ある日オジサンが「コツがわかった。こっちからどんどん話題を変えて話していけば、繰り返しが減るよ」って。

大石 お互い、すぐに離婚しそうな予感があったから。10年過ぎたころにやっと、お互いのものをぐちゃぐちゃにした。特に理由はないんだけど。

阿川 そうなってからも、離婚しようと思ったことはあるんですか。

大石 あるあるある。今も昨日も一昨日も(笑)。なんて言うのかしら、見るのもイヤになっちゃうときもあるわ。基本、夫のことは好きなのよ。会話も楽しいし、いないと寂しい。だけど、若いときのスラッとしたキレのいい感じが今はまるでないんですもの。それが時々猛然とイヤ。

大石 話し合って離婚届を書いて、いざ提出っていうときにガンが再発して即入院。当時夫は舞台の仕事でものすごく忙しかったんだけど、毎日一生懸命看病に来てくれた。私のパンツを干している姿を見て「この人を失わないほうがいいかな」ってしみじみ思っしまい、それで離婚は取りやめ。

阿川 旦那さん、本当に素晴らしい人だなあ。

大石 その後よ、放射線治療や自宅療養をしながら鬱々としているときに、夫が「やりたいようにやれ、世間が何と言おうとも、自分の人生だ」と言ってくれたのは。

阿川 こう言っちゃなんですが、大切な奥さんの余命があとどれくらいか不安、だったら好きなことをやらせてあげたい、という気持ちもあったのかも？

大石 夫はときどき遠い目をして言ってる、「儂(はかな)い命の嫁をもらったと思ってたけど……」って。

阿川 「ずいぶんと長生きしてるね」って(笑)。

大石 でも、夫は当時それなりにモテたみたいで、儂(はかな)い命の嫁がいながら裏で、適当に女性とつき合ったりしてはいました(笑)。

阿川 あ、そうなの？ 証拠はつかんでたんですか。

大石 だいたいわかるわよ。ただ、遊び感覚の浮気っぽかったから別にいいかなって。当時、私はオペラのキュー出しのアルバイトをしてたんだけど、夫とたまたま一緒の仕事になったこ

とがあったの。夫は舞台監督でしょう。コーラスの女の子の中に気に入った子がいて、50人くらいいるコーラス隊の前で、その子に「君だけに」ってお菓子を渡したりするのよ。照明室から私はその様子を見て、「へえ〜こうやって口説くのか」と観察してた。

阿川 舞台監督に「君だけに」なんて言われたら、新人はコロリと落ちるな。

大石 次の日には女の子が、夫のことを目で追ってるのがわかるのよ。私は旧姓で仕事をしてきたから夫婦だと気づかれてなくて。

阿川 けっこうプレイボーイだったんですね。

大石 私も好きな人ができると一直線で、夫に目がいなくなる。それを見た夫は「いつまで生きるかわからない儂い命だから、好きな人がいるなら好きにすればいい」と。

大石 あるとき、私が婚外恋愛で夢中になった相手が独身で、「結婚してくれ」って言うから「お父さん、結婚してくれって言われちゃった。どっちが好きかっていえば今はあっちが好きかも。またちょっと離婚したいかも」って相談したの。そしたら「君がそっちへ行きたいんならしょうがない。いいよ」ってすぐ回答がきた。

阿川 それって、結婚してどれくらい経ったころ？

大石 10年ぐらいかな。「好きなことをやりなさい」と言われてから7年後。それで、そのとき初めて三者面談をしたの。夫と、その「結婚してくれ」男と、私とで。

阿川 えええっ？ つまり、離婚調停という段階ですか？

大石 いや、まずは夫が彼に「この人を大事にしてやってくださいよ」と……。

阿川 ちょっと待って。それ、大石さんは納得してたんですか？

大石 それでおさまればいいか、くらいに思ってた。別れても夫はきっといい友人でいてくれるだろうし、イヤになったら戻ってきてても許してくれそうだなと（笑）。

阿川 なんと図々しい！ 戻るつもりだったんかい！

大石 でも、そのときの私と夫のやりとりを見て、つき合っていた彼が「すみません、今のままでいいです」って言ったのよ。こつちとしては「ハア〜？」みたいになっちゃって。

阿川 怖気づいたんですかね？

大石 「どういうこと？ うちの夫は一緒になりなさいって言ってるのよー」って詰めよったら「自信がなくなった」って。

阿川 夫婦の間にスキが見えなかったんじゃないの？ どうせなら元旦那とは思いつき憎しみ合って別れてほしいって思ってたんですよ、その若者は。

大石 その後も私は彼が好きで別れられなかったんだけど、だんだんと暴力を振るうようになって別れちゃった。夫が「暴力振るうのだけはやめてもらいたい」って彼に言いに行ってくれたんだけどね。

阿川 保護者か！

大石 彼に殴られて顔が腫れたとき、夫が医者に連れてってくれたのね。そしたら担当医師が夫をすごく睨んだの。夫は「僕じゃない」と弁明して、私もあわてて「この人じゃないんでって説明して。帰り道、申し訳ないな、やっぱり夫のほうがいいなってしみじみ思ったの。

阿川 そもそも、旦那以外の男の、どこがそんなによかったんですか。

大石 ……エッチが……。

阿川 ああ。

大石 だから、なかなか別れられなかったの。だけど暴力はねえ。

阿川 よく、エッチしても心さえ奪われていなければいいっていう人がいるけれど、やっぱりこれはすごく大きな問題じゃないかと思うんですけど。旦那さまは、妻が若い男と四六時中エッチしてるということについては、どう思っていたらんでしょう？

大石 夫は今でいう草食系男子。女の子と仲良くなっていくプロセスが好きなタイプ。ねちっこくないっていうか、エッチもスルスルって終わって本を読んでもみたいな感じ。そしたら、私の価値観を揺るがすような男が登場して……。

阿川 燃えたぎっちゃったんですか。

大石 まあね……25歳で結婚して30歳ぐらいから夫とはほとんどセックスレスだったし。「僕が力不足だからねえ」って認めてたもの。でもね、不思議なことに、婚外の男と過ごした後って、すぐ家に帰りたくなるの。さっさと身支度しちゃう。早く家に帰って、夫とワインでも飲んだほうが楽しいなって。

阿川 後ろめたさはないんですか？

大石 三者面談して以降は後ろめたさゼロになっちゃった。凶々しいわね、すみません。

阿川 それにしても不思議なご夫婦ですね。絶妙なバランスが保たれているような。

大石 いろいろありましたが、なんとか今も暮らしてます。

大石 話がつまんない男はダメよね。

阿川 それに「この人つまんない」と思ってる自分にもビックリした。大石さんの元カレの話じゃないけど、昔は私も見た目とかセンスの良さとか、そういう外見重視のオンナでしたからね。でも、歳を重ねるにつれ、そういう要素はどんどんどうでもよくなってくるのね。もうぜんぜん面食いじゃないもん。でも、背が高い人が好きな傾向は、まだ残ってるかな。

大石 私も大きい人が好き。小さいからね、私たち。150Cm コンビ。

阿川 背が高いだけでプラス20点ぐらいになりますよね。少々話がつまんなくても。

大石 ちなみに夫は185cmあったのよ。今はもう縮んじやったから182cmくらいになってるらしいんだけど。

大石 高価というか、オシャレして書くのよ。「私が一番素敵に見えるもの」を着て。

阿川 やだ、落ち着かないよ。

大石 すごいでしょう？ 私も50代の初めくらいまでは、素っ裸の上にシルクのネグリジェみたいな服を着て書くのが自分にはいいと思ってたの。でも最近、向田さん風に「これが私に一番似合う」と思えるものをあえて着て、さらにヘミングウェイのように立って脚本を書きます。

阿川 え、立って書いてるんですか？ なんで？ 疲れない？

大石 立っているほうが案外集中できるし、眠くならないわよ。この前、電動で高さが上下するデスク買ったの。高かったけど。

大石 それにしても、**更年期障害**の度合いは本当に人それぞれよね。

阿川 私は今でも軽いほうだと思ってますけどね。ただ、あまりにも辛い状態が続いたときは、本気で仕事をやめようかと思いました。**誰にも会いたくないし、イライラするし、すぐに泣きたくなるし、汗はすごいし。**

大石 そこまで思うのって、決して軽くはないと思うわよ。

阿川 そう？ それでまた母に、「更年期障害が辛いんだけど、母さんはどうだった？」 って聞いたんです。そしたら、「どうだったかしら。たいしたことなかったような気がする」 って言われてがっかり。相談相手にもなりやしない。親子なのにこんなに違うものかって驚きました。

大石 うちの母もそうよ。「まったく覚えてないわ」 って。

阿川 それで、60代半ばぐらいの女性に「辛いんですよ」って訴えたら、「でもそれ、まだ10年は続くわよ」って言われてショックで。確かに今でもまだときどきホットフラッシュがきますからね。最初のホットフラッシュから勘定すると10年以上経ってるのに。

大石 そうなのよ、続くのよ！ だから私の担当医は「女性はホルモンの薬をサプリメントだと思って、生涯飲んでもいいと思う」って。リスクはあるけどね。ただし、保険がきくのは60歳までなのよ。以降は自費になる。結局、ある程度お金がないと女性ホルモンも補充できないのよね。

阿川 介護もそうだけど、医療って結局、お金があるかないかで対処できることが違ってくるんですね。あと、更年期障害って腰痛と同じで、見た目にはほとんどわからないし、そもそも病気がわけでもないから、他人に、特に**男性にこの痛みやイライラを理解してもらおう**と思っても、なかなか難しい。そこが、一番辛いところだと思います。

「したい仕事」より「必要とされる仕事」を

大石 じゃあ、評価してもらおうところにどう身をおくかっていうと、「必要とされる」ってことに尽きると思う。阿川さんだってそうじゃない？ きっかけはどうであれ、テレビに出てみないか、書いてみないか、と言われるってことは、必要とされているということ。私なんて、誰にも必要とされていなかったもの。

大石 私はずっと、「これしかない」という思いで脚本家をやってきました。女優時代はまったく見向きもされなかったのに、私の脚本はこれほど必要とされている、こんなこと今までなかった。だから、絶対に手放さないと誓って、いかなるチャンスも逃したくないし、つべこべ言わずに踏ん張ってきた。でもね、こんなに長く脚本家をやっているのに、**いまだに脚本を書くことは辛いし苦しい**。楽しいと思いながら書いたことなんて一度もないんです。仕事が好きかと聞かれたら……よくわからないし。

阿川 私も、**インタビューの仕事好きじゃない。書く仕事も、辛い**。

大石 「好き」とか「楽しい」よりも、「辛い」のほうが大きい。

阿川 ときどき「楽しい」がある。ふりかけのように、はらりと少しだけ。

大石 そうそう、まったくその通り。

阿川 女性誌の取材でよく聞かれるんです。「好きな仕事をして生きていくためにはどうしたらいいですか」「やりがいのある仕事が見つからない」「自己実現するには？」

大石 「好き」とかそういうことの前に「これしかない」と思えるかが大事だと思う。好きなものなんかそうそう巡りあわないし、やりたいことかどうか、自分に向いているかどうか、案外自分で判断するものじゃないのかも。自分の経験をふりかえってみると。

阿川 各界で活躍されている方たちもみんな同じことを言っています。「結局、自分の能力は自分じゃわからない。人が見てるもんだ」と。私だって、「先日のインタビューの聞き方はうまかった」「この間のエッセイはよかった」とおだてられ、周囲を頼りに仕事を続けていると、また別の人が気づいてくれて「こういう仕事をやってみないか」と持ち掛けてくれて今がある。だから、「ここは私の場所じゃない、私の能力が生かせる場所はほかにある」という考え方は、ちょっとおこがましいと思うの。

大石 まったく同意見です。今いる環境で与えられた仕事もきちんとこなせない人が、別のところへ行ってもうまくいくなんて思えないから。

「夢は必ず叶う」なんて嘘だから

阿川 最近、特に思うのだけれど「バラ色の仕事、バラ色の職場、バラ色の人生」がどこかにあると、皆さん思っている節がありません？

大石 そうね。私は自分の生まれ育った環境から、小さいときにすでに「生きることは辛い」とうっすら感じていたから、人生は厳しいという現実に向き合えたけれども。

阿川 私も理不尽な父親のもとで罵倒されて育ったから、この親のもとで生きてきたなら、どこへいってもやっていけるという妙な自信がありました。

阿川 あるとき、テーマが若い人の性問題だったかな、「週に何回くらいセックスをしたいですか」という質問に誰も答えないから「若いんだから週に3回はするでしょ」って発言したら、ビートたけしさんはじめ、オジサマたちが全員ずっこけて。「阿川さんってそんなこと言う人なんだ」って呆れられて。あれから何かが吹っ切れましたね。そのまんまの私でいいんだなって。普段の姿を知っている友人はみんな、『タックル』に出てから、やっと本当のアガワに戻ったね。ずいぶんといい子ぶって賢ぶってたもんね」と言っていました。

大石 とにかくセリフが命だと思っています。普段、人が話すときって、2割の本音でしゃべって残りの8割は隠してるものじゃない。うまい脚本はその2割の会話で8割を感じさせる。「この人はこう言っているが、実はこう思ってるな」と。

阿川 ひえー、難しい仕事ですよ。

大石ほんとにね。脚本家の山田太一先生は「キャラクターは語尾に宿る」という持論で、演じる側が絶対に語尾を変えちゃいけないのよ。「寒いね」「寒いですね」「寒くね？」これだけでも、全然性格が変わってくる。だから、ベテラン俳優ほど、語尾を勝手にアレンジすることなくきちんとセリフを言うのよ。セリフの重みを知っているから。

阿川 最近の若い役者さんはどうなんですか？ 先日テレビ番組で一緒した若い役者さんは、仕事が終わると一刻も早く家に帰ってゲームをやりたいと。家でひとりでゲームをしたり、友だちとラインをやってるときが一番テンションが上がるって。

大石 役者さんと直接の交流はあまりないんだけど、若者たちはみんな同じだと思うな。

阿川 その彼に、「恋愛は？」と聞いたら「**二次元と恋をしています**。二次元の女性のほうがキレイだしいい子だし、リアルな恋愛はプロセスを考えたらものすごく面倒くさい」って。

大石 傷つきたくないのね。

阿川 しかも潔癖症が多いらしい。特に男子に。セックスも「キレイな子じゃないとできません」って。

大石 何ふざけたこと言ってんのかしら。

阿川 大石さんにとって、**仕事の醍醐味**ってなんですか。

大石 **出会いがあること**。有名無名にかかわらず、たくさんの人との出会い。結局は、なんでも「人」だと思う。

阿川 まさに。インタビューが下手で嫌いだった私が今も続けているのは、普通に生きていたら会えないような素敵な人たちに会って、話を聞くことができるから。

大石 私の場合、自分の作品を通してひとりでも多くの人がザワツとしたり何かを感じたりしてくれたら、やっぱりうれしい。**結局、「必要とされること」**じゃないかな、仕事をする醍醐味って。

阿川 いつまで仕事を続けますか。

大石 注文がある限り。死ぬまで仕事はしたいです。